

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

113

幻の寺

く金原寺く

長岡京市内にある唯一の天皇陵、それが土御門天皇金ヶ原陵です。金ヶ原集落西方の美しい柵田が広がる山麓に位置していて、大きく東側に眺望が開いています。

土御門天皇は後鳥羽天皇と承明門院源在子との間に第一皇子として生まれ、わずか4歳で即位しました。非常に優雅で温和な性格であったと伝えられています。

承久の乱(1221年)の後に、父の後鳥羽上皇が隠岐へ、弟の順徳上皇が佐渡へ流されることが決まり、土御門天皇(当時は上皇)も乱とは無関係にもかかわらず自ら土佐国(高知県)に流され、後に阿波の国(徳島県)に移り、1231年そこで37歳の生涯を閉じました。同地で火葬された遺骨は京に帰り、1233年、その供養のために母承明門院在子が建てた金ヶ原の法華堂に安置されました。法華堂は別名金原御堂とも呼ばれ、金原寺という名は後世のものです。

1242年に土御門天皇の息子が後嵯峨天皇として即位したことによって復権し、盛大に法要が行われるようになります。この年の10月に金原御堂で法要が催され、1244年にも13回忌の法華八講が行われたとあります。おそらくこのような過程の中で、金原御堂は徐々に整備されていったものと思われます。しかし1268年を最後に記録は途絶えてしまいます。そしていつの頃から廃絶してしまっただろうで、まったく別の場所が土御門天皇陵と考えられるなど混乱が生じていました。江戸時代になって、現在の場所が土御門天皇金原

陵とされ、その際大石がある石塚と呼ばれる小丘が法華堂跡と推定されました。

現在のところ金原寺の正確な規模や、なぜこの地が遺骨の安置場所選ばれたのかは判っていません。おそらく土御門天皇あるいは母の承明門院在子とゆかりのある土地だったのでしょう。

1997年に土御門天皇陵の近くで発掘が行われ、寺の遺構は見つかりませんでした。これは盛大に法要が営まれていた時期と一致するもので、幻の寺金原寺の一つの手掛かりが得られました。



▲土御門天皇金ヶ原陵と発掘調査地(北東から)